

佐藤時啓さん(アーティスト)の紹介

1957年山形県生まれ。東京芸術大学大学院美術研究科修了。写真やカメラをとおして、人々のコミュニケーションや視線の交錯をテーマとし、展覧会やプロジェクト活動、ワークショップなど幅広い活動を行っている。「ハバナ・ビエンナーレ」(1997)ほか多数。2003年には、第20回現代日本彫刻展にて宇部興産株式会社賞を受賞している。現在、東京芸術大学先端芸術表現科助教授。



ルチーダフレンズの紹介

2005年3月まで予定されている「カメラオブスクラプロジェクト」で、佐藤時啓さんとともに活動を行うボランティア(コラボレーター)グループです。プロジェクトの企画の立案、準備、運営、記録、教育普及活動協力など、多岐にわたる活動を行っています。年齢層は10代~50代で、大阪や福岡からの参加者も含まれます。

YCAM展示情報

「obscura machina 2004」 佐藤時啓

期間:10/24まで 場所:ホワイエ2F

「モレルのパノラマ」 藤旗正樹

期間:10/24まで 場所:スタジオB

パトリック・ゲディスの思想「カメラオブスクラ」

期間:10/2.3限定 場所:中央公園

主催:文化芸術による創造のまち山口実行委員会、文化庁、山口県、
山口市、財団法人山口市文化振興財団
助成:財団法人エネルギー文化・スポーツ財団
後援:山口市教育委員会
企画:山口情報芸術センター/山口情報芸術センター市民委員会



「アートふる山口」出展 meets the artistシリーズ
ルチーダフレンズ presents

でっかい 「カメラ」に入ってみよう!!

最近のカメラは、ずいぶん小さくなりましたね。
皆さんカメラの中に入ったことはありますか？

これは、人が入れる大きさのカメラです。
アーティスト佐藤時啓さんの作品「ワンダリング
カメラ」です。

佐藤さんは、この「ワンダリングカメラ」をもっ
ているんなところを旅しました。そこで、「見る」「見
られる」という出会いをくりかえしてきました。

出会った人たちは、カメラの中で“なに”をみて、“な
に”を感じたのでしょうか？

そして、あなたの見るいつもの“まち”の風景は、
今日この場所でいったいどんなふうに見える
のでしょうか？

meets
the
artist
市民の企画

山口情報芸術センター
Yamaguchi Center for Arts and Media

「カメラ」(camera)は「部屋」、オブスクラ(obscura)は「暗い」を意味するラテン語です。暗い部屋の中へ小さな穴から差し込んだ光は、その先に何かを映し出します。これがカメラの原理である「カメラオブスクラ」です。

この仕組みを応用した「ワンダリングカメラ」は、てっぺんについたレンズをとおして、外にあふれている光をあつめます。レンズをとおった光は、鏡によって向きを変え、中にいるわたしたちの上に降りそそぎます。暗い部屋の床やわたしたちの上で、光は像となって外の風景を映し出します。レンズは360度回転するので、わたしたちは中にいながらまわりの風景を見ることが出来ます。

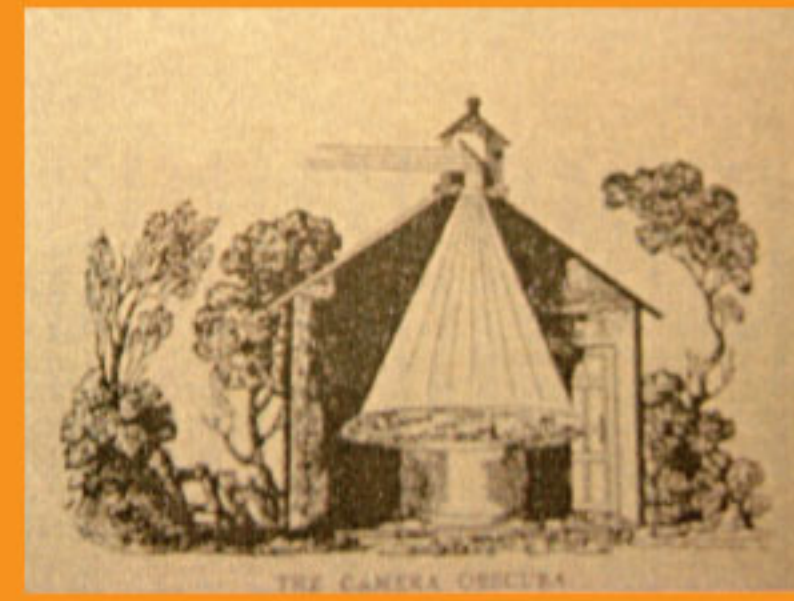
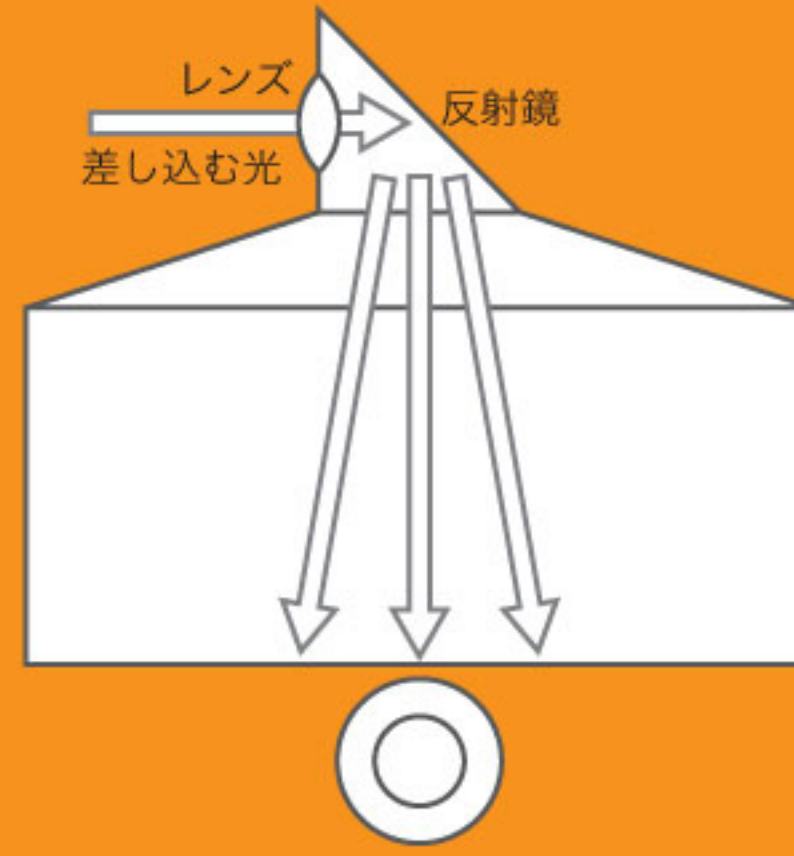
紀元前の時代から、わたしたちはその光景を偶然にも見てきました。その後カメラにレンズをはめこみ風景を描写したり、ヨーロッパでは見せもの小屋をつくったりして見ることはやっていました。

日本でも、雨戸にあいた小さな穴から漏れる光が逆さまになった富士山を障子にうつし出す絵が残っています。

その後、感光材料が発明され、「写真」として記録されるようになりました。今では、カメラ付き携帯やデジカメとして「カメラオブスクラ」はとても身近な存在になっています。

※「かぶるカメラの作り方」をみて、自分のカメラオブスクラを作ってみましょう。

光をうつしとってみよう！



18世紀のカメラオブスクラの様子
(「カメラ・オブスクラ年代記」ジョン・H・ハモンド 朝日新聞社より)



葛飾北斎「富嶽百景」

